

市民が築いた天守閣

昨日 25 日、宮本憲一先生のインタビューを紹介したが、そのなかの「大阪市は市民がつくった市民の資産です。その資産を行政上の都合で取り上げるのは暴挙です」に、写真の『大阪民主新報』25 日の元大阪城天守閣館長の渡辺武さんのことばを重ね合わせた。初めて知ったこともあり、抜粋してほしい。

現在の天守閣は 1931(昭和 6)年に竣工した、鉄骨・鉄筋・コンクリート造りの高層建築で、復興計画は天皇即位を祝う「御大典」の記念事業として考えられました。



28(昭和 3)年の大阪市議会に、当時の関一市長が、豊臣時代の大天守閣を市民の手で復興して郷土歴史資料館とし、本丸を市民のための都市公園として整備する案を提案し、全会一致で可決されました。当時は国も府も大阪市も財政難の中、市民に寄付を呼び掛けると、半年足らずの間に目標の 150 万円が集まりました。トップは住友財閥の当主、住友吉左衛門の 25 万円。船場の商家の旦那衆は 1 千円以上、一般市民でも 10 円、20 円、子どもでも 10 銭ずつと、約 7 万 8 千口もの寄付で目標を達成したのです。

戦後すぐ米軍は天守閣を含む大阪城すべてを接收し、48(昭和 23)年に大阪市に返還されるまで市民立ち入り禁止が続きました。返還の翌年、応急修理をして天守閣は一般公開を再開。いま、大阪一の観光施設、独特の歴史博物館施設として、世界に誇る大阪のシンボルとなっています。そうした歴史を知らずに、2015 年から天守閣を含めて大阪城公園を、民営化で企業集団に管理を委ね、もうけ本位の商業施設化を進めた維新政治は腹立たしく、残念でなりません。ここでいま一度踏みとどまり、大阪市の歴史の重み、文化度や生活度の高さを取り戻さねばと思います。

「大阪は人情の街」と言われますが、それは「福祉の街」であり、どんな貧しい人でも大切にして大阪が受け入れ、共に生きていく。「自分たちの街の中に行き倒れ、生活ができない人が一人でもいれば恥だ」というのが大阪人のプライド。そうした本当の大阪らしさが急速に失われていったのは、バブル崩壊以降、特に 10 年続く維新政治の下でのことです。「自己責任で競争し、生き残るのが当たり前、などと公共サービスを切り捨ててきた維新の発想は、大阪の良き伝統とは正反対のものです。

今回の住民投票は大阪市の歴史の岐路です。大阪市という歴史と誇り、深い愛着のある大都市を永遠に無くしていいのか。そのことを大阪市の有権者の皆さんに、何よりも分かっていたいただきたいです。

大阪市をいったん廃止すれば、二度と元に戻れません。大阪市がやるべきことは、まだまだ多くあります。政令指定都市の力、大阪の良き伝統を生かして、もっと住み良い、営業のしやすい、そして文化度の高い街にしていきたいと思います。一人でも多くの方に、大阪市廃止に「反対」の声を上げましょう。

(2020 年 10 月 26 日)